

大和川 付替え物語



付替えの功労者、中甚兵衛の銅像（築留治水記念公園内）

江戸時代の大治水工事

付替えは柏原から始まった

監修・山西敏一



大和川付替え地点から西を望む

企画・発行

大阪府柏原市役所
（総務部自治推進課広報聴係）

☎0729(72)1501 FAX0729(71)1197

URL <http://www.city.kashiwara.osaka.jp/>

Eメール jichi@city.kashiwara.osaka.jp

著作 柏原市

印刷 株近畿印刷センター

平成16年4月30日 第1版発行

本書についてのご意見ご指摘などは
広報聴係まで、お寄せください。

発刊によせて

「頃は元禄…」という、忠臣蔵が有名です。しかし、それにも増して重大で特筆すべきことが、忠臣蔵と同じころに起こっていました。治水対策として、現代にも連なる大工事、大和川の付替えです。



山西市長

大和川の付替えは、慢性的な洪水の被害から、柏原を始めとする流域の住民を救っただけでなく、これらの地域の、その後の経済的発展の基盤を作りました。忠臣蔵は、よく知られています。しかし、大和川の付替えこそ、現代に生きる私たちにとって忘れてはならない大切な出来事ではないでしょうか。

奈良盆地の諸流を集め、本市「亀の瀬」溪谷を抜けて大阪平野を流れ、大阪湾へ注ぐ大和川は、古くから歴史や文化を育み、四季を通じて人々の暮らしを豊かに彩ってきました。大和川が中心部を豊かに流れる現在の柏原の姿は、宝永元年（1704年）に行われた大和川の付替えに始まります。2004年は、それから300周年という記念の年にあたります。

大和川の付替えは、洪水の被害を防ぐため、当時の人々が何十年にもわたる住民運動を続けた結果、完成したものです。

このような誇るべき大工事が300年も昔に行われたという歴史を振り返るとともに、私たちみんなの力によって母なる川「大和川」の未来をより明るいものにしようとの思いをこめて、この冊子を発行するものであります。

この冊子が、大和川に対する理解を、よりいっそう深めるために少しでもお役に立てば幸甚に存じます。

平成16年（2004年）4月30日

柏原市長 山西敏一

目次

第一部

付替えへの経緯、付替え工事、付替えの工夫、
大和川付替えにまつわる話、全国の災害発生状況

4

第二部

その後の大和川、現在の大和川

14

第三部

その後の甚兵衛、付替え工事関係大名家の系譜、柏原舟と大和川の付替え、
大和川治水・殿中殺人事件、大和川付替え関係・これまでの記念行事など、
資料館など

20

付替えへの経緯

1 たびかさなる洪水

大阪平野は、大和川などの川によって作られた平野であるため、そこには常に洪水の危険がつきまわっていた。古くは、飛鳥、奈良時代から洪水の記録があり、江戸時代になってからでも、元禄年間までの約八十年の間で十数回もの洪水が河内地方を襲っている。大和川は、自らの堆積作用により天井川となっていたため、ひとたび洪水が起ると、その被害は計り知れないものがあつた。

ことに延宝二年（一六七四）から三年連続、計四回の洪水は「未曾有」と表現され、被害は河内地域だけでなく大坂（「大阪」という表記は明治以後）市中にまで及んでいる。柏原市域に限って見れば、特に寛永十年（一六三三）の被害が甚大で、当時の柏原村の大半にあたる四十から五十軒もの家屋が流失し、三十六人の死者をだしている。

川ざらいなどの対策も行われていたが、抜本的な解決には至っていなかった。たびかさなる洪水によ

り、人々の生活は疲弊の極に達していた。

2 約五十年にも及ぶ付替え嘆願

こうした被害をなくすため、明暦三年（一六五七）ごろ、河内地域の農民から抜本的な大改革案が、幕府に直訴・嘆願された。大和川を、その支流・石川との合流点付近から西に向け、直接、住吉・堺の海へ流れ込むように付け替えるという案である。

このアイデアそのものは、古くからあつたようである。奈良時代に和氣清麻呂が取り組んだのも、この方法によるものだったと言われている。しかし、技術的、資金的問題から実現不可能とされていたようだ。

洪水に苦しむ流域各郡の代表者達は、大和川の付替えを何度も幕府に嘆願した。

この付替え促進運動で中心的役割を果たしたが、今米村（現在の東大阪市）の庄屋、中甚兵衛である。

これに対して、付替え予定地にあたる村々は、激しく反対。逆に幕府に対して、付替え反対の嘆願を

行い、河内を二分する様相となった。

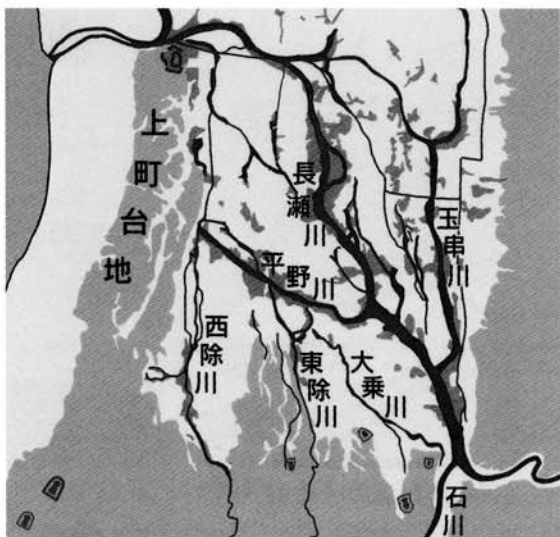
幕府は、たびたび現地を検分、付替え以外の解決策も検討された。こうしたところから幕府による付替え決定まで、約五十年もの歳月を要することとなったのである。



寅年大洪水により、付替え促進運動は一気に拡大した。付替え促進運動は、大県郡や洪川郡、さらに東成郡まで加え、一時は合計二百五十から二百七十カ村にまでふくれあがった。

しかし、天和三年（一六八三）、幕府が大規模な実況検分（第四回目の実況検分。第一回目は万治三年・一六六〇）の結果、「付替えは取るにたらない愚策」とする河村瑞賢の意見を採用し、「付替え廃止」を決定したことから、付替え促進運動は縮小化していった。

ところが、その瑞賢の意見に基づく下流の改修工事が完成した直後の元禄十三年（一七〇〇）以後も洪水が続発したのである。



付替え前の大和川

たくさんの流れに分かれて、河内平野を流れていた。まさに「河内」であったわけだ。

ここに至って、ついに幕府は方針を転換、第五回

目の実況検分の後、元禄十六年（一七〇三）十月、大和川の付替えを正式に決定した。「付替え廃止」決定後も窮状の訴えに戦術を転換するなど、ねばり強く運動を続けた中甚兵衛らの努力が実を結んだ瞬間だった。時に甚兵衛、六十五歳の秋のことである。

付替え経緯年表

明暦3年(1657)ごろ 河内の農民から幕府に対し、大和川付替えの嘆願。

万治3年(1660) 幕府による付替え検分(第1回)。新川筋予定地の村々(約30カ村、約2万石)が、反対。

寛文11年(1671) 幕府による付替え検分(第2回)。新川筋予定地の村々(約30カ村、約2万石)が、反対。

延宝2年(1674) 寅年大洪水(「未曾有」の広域大洪水)。付替え促進運動の広域・大規模化。河内郡、若江郡、茨田郡、讃良郡、高安郡、渋川郡、大県郡(以上、河内の国)、東成郡(摂津の国)、250から270カ村(約15万石)が、付替え促進。新川筋予定地の村々は、反対。

延宝4年(1676) 幕府による付替え検分(第3回)。新川筋予定地の村々が、反対。

天和3年(1683) 幕府による付替え検分(第4回)。大規模調査。幕府、「付替えは、とるにたりない愚策」とする河村瑞賢の意見を採用。付替え廃止を決定。淀川河口の改修、しゅんせつを実施。運動の規模の縮小化。東成郡、渋川郡と若江郡のうち、久宝寺川筋の村々が脱退。

貞享3年(1686) 河村瑞賢による第1期工事が完了。

貞享4年(1687) 幕府、しゅんせつのため、川奉行を設置。治水運動派(旧促進派)、河内郡、若江郡、茨田郡、讃良郡、高安郡の五郡(7万石)に半減。

元禄2年(1689) 治水運動派(旧促進派)、河内郡、若江郡、茨田郡、讃良郡の4郡(約60カ村、約3万石)に減少。

元禄4年(1691) 洪水被害。

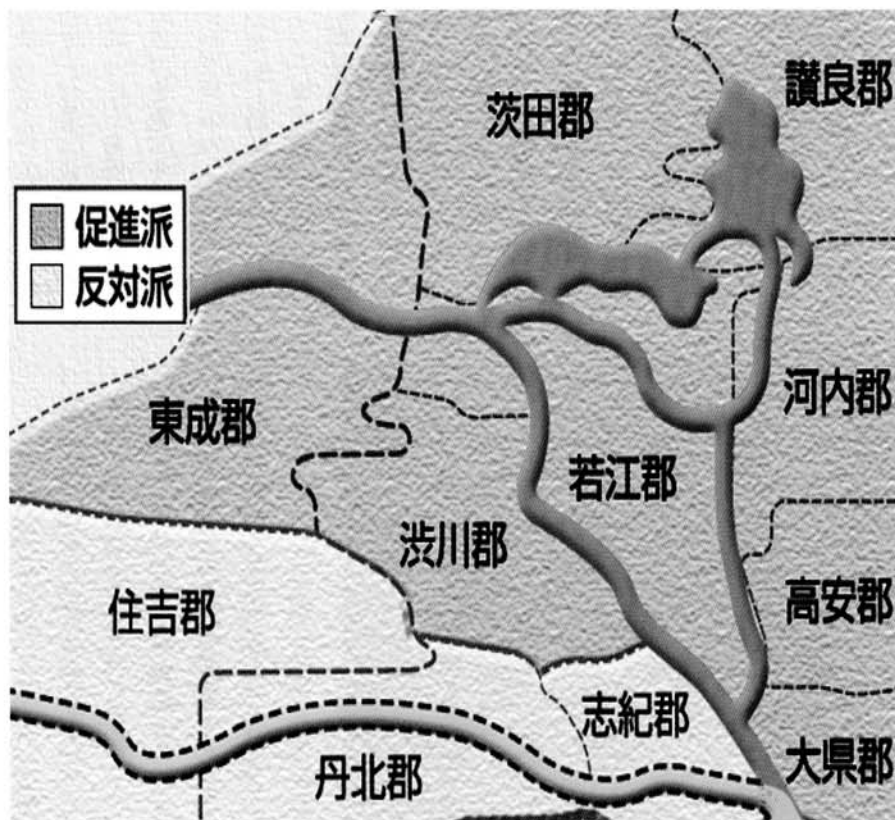
元禄12年(1699) 河村瑞賢による第二期工事が完了。

元禄13年(1700) 洪水被害。

元禄14年(1701) 洪水被害。この年、今米村、年貢なし。

元禄16年(1703) 幕府、方針変更。検分(第5回)の後、付替えを正式に決定。このころの治水運動派(旧促進派)は、42カ村(約2万石)。反対派は、33カ村(約2万石)。

元禄17年(1704) 反対派、嘆願のため江戸に下るが、付替え決定後のため、代替地の嘆願に変更。



付替え促進派と反対派の分布図

付替え工事年表

元禄16年(1703)10月28日 幕府、大和川の付替えを正式に決定。普請奉行、助役などを任命。これは、幕府による河川改修工事で、大名に対して助役・御手伝普請命令が出された最初の例である。

普請奉行=大久保甚兵衛忠香、伏見主水為信、万年長十郎頼治

助役=本多中務大輔忠国(摂津・姫路15万石)

普請御用=中甚兵衛ら

元禄17年(1704)2月13日 柏原で着工式。

2月27日 工事開始(2月15日とする文書もある)。

3月13日 年号が「宝永」と改元される。

3月21日 本多忠国、病死。

4月1日 新たに御手伝普請役、任命される。

御手伝普請役=岡部美濃守長泰(和泉・岸和田5万3千石)、九鬼大和

守隆方(隆久)(摂津・三田3万6千石)、松平左兵衛佐直常(播磨・

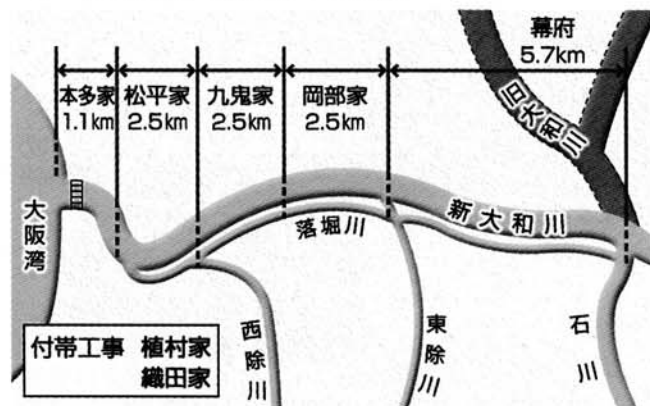
明石6万石)

6月28日 付帯工事のため、御手伝普請役を追加任命。

御手伝普請役=植村右衛門佐家敬(大和・高取2万5千石)、

織田山城守信休(丹波・柏原2万石)

10月13日 工事完成(新川切り通し)。



各藩の付替え工事の分担

付替え工事

1 工事の実施

付替え促進派の今米村(現・東大阪市)庄屋・中甚兵衛らの長年にわたる必死の努力の結果、ようやく付替えが決定されたのは、元禄十六年(一七〇三)十月のことだった。着工は、翌、元禄十七年(一七〇四)二月。石川との合流点付近、現在の柏原市役所のあたりから西へ、延長約十四キロメートル、幅約百八十メートルの新しい川を作る工事が開始された。工事は、幕府が費用を負担する公儀普請として行われたが、大名も御手伝普請として工事の助成を命じられた。

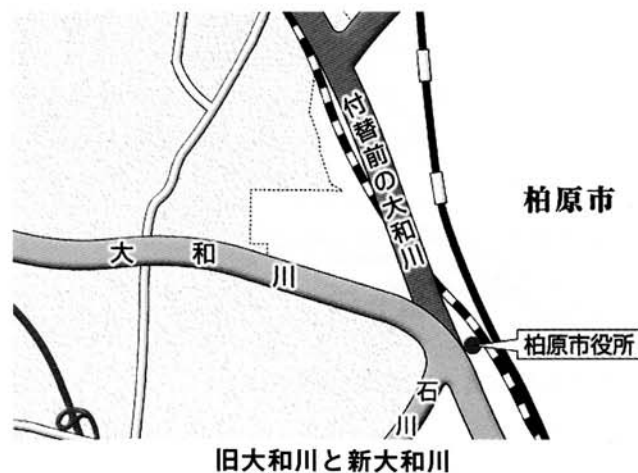
工事の完成は、同じ年、宝永元年(一七〇四)(三月に改元)の十月。着工後約八カ月という超スピード工事だった。

2 工事の費用など

工事の費用は約七万七千両(約二百億円から三百億円)。うち、幕府の負担は、大名への助成を含め

て、約三万七千両。ただし、旧川筋の新田開発についての入札代金が約三万七千両だったため、幕府にとっては収支はほぼ同額だった。

※実数は、延べ約二百八十六万人と推定されている。工事従事者も延べ約二百四十五万人(見積書)



旧大和川と新大和川

付替えの工夫

1 浅香の千両曲がり

新しい大和川は、浅香山のあたりで大きく南へ湾曲している。これを「浅香の千両曲がり」と言う。このあたりは、上町台地の付け根にあたるため、深い掘割りとなっている。工事に際しては、依羅池よさみいけや浅香谷を利用するなど、台地を横断する距離を少なくするための工夫が行われた。大岩を取り除く作業では、狐の供養と称して、岩の上で火を燃やし十分熱したあとで急に冷やす、という方法で岩を割ったと言う。

これも神仏に対する人々の畏れおそや不安を鎮めるための工事に際しての工夫といえるだろう。

2 太田の千両曲がり

新しい大和川は、太田や沼のあたりでも弧を描くように流れている。こちらは、「太田の千両曲がり」と呼ばれる。当時、太田や沼が天領だったため、奉行に千両贈って曲げさせたのだ、などと言われた。

しかし、実際には、南から流れ込んで来る、大乗川や東除川との水準を合わせるための処置である。

3 大和川と落堀川との合流点

新しい大和川は、河底を掘り下げると言う工法よりも、堤防を盛り土するという工法の方が多く採られた。このため、南から流れて来た水は、そのままでは高い堤防がじゃまになって大和川に流れ込むことができない。そこで、新しい大和川の左岸の堤防に沿って、延長約三キロメートルの落堀川という川が掘られた。落堀川は、南から流れてくる水を集めながら大和川に合流するように工夫されている。

付替えにまつわる話

1 浅香山稲荷

付替え工事の助役・本多忠国が急死したのは、浅香山の狐のたたりだと言われた。浅香山稲荷社には、普請奉行の大久保甚兵衛や川口奉行の松平氏重らが、工事終了後、石灯籠や手水鉢などを奉納している。

2 二人の甚兵衛

付替え促進運動で中心的役割を果たしたのが「甚兵衛（中甚兵衛）」なら、付替え工事の普請奉行もまた「甚兵衛（大久保甚兵衛）」である。これを遠慮したのか、中甚兵衛は、工事開始後、「甚助」と改名したという。さらに、以後、中家では、当主は「甚兵衛」ではなく「九兵衛」を名乗っている。中甚兵衛十代目の子孫で甚兵衛研究の第一人者でもある中好幸氏なかよしゆきは、江戸時代まで続いた九兵衛名を復活襲名（明治の戸籍法によって使用できず）し、「九代目・中九兵衛」と名乗っている。



大和川と落堀川との合流点



浅香の千両曲がり

3 取水樋

（元の流れの一部を農業用水路に）

人間が生きていくうえにも、また、農業や工業など各種の産業を行ううえでも、水が不可欠なことは言うまでもない。大和川がたびたび洪水を起すからといって、「水」と完全に縁を切って生きていけるものでもない。このため、大和川の本流は付け替えられたが、元の流れの一部は農業用水として残されることとなった。長瀬川や玉串川、平野川などがそれである。

そして、新しい大和川の堤防には、水を引き入れるための樋門が設けられた。これは今も活用されている築留樋や青地樋などである。さらに、樋の管理のため、関係する村々によって樋組と呼ばれる用水組合組織が設置された。併せて、村ごとにも取水口などが整備されたが、大切な水の管理のため厳しい決まりが設けられたという。各樋と通水先の村々は、次のとおりである。

築留樋Ⅱ長瀬川、玉串川沿いの七十八カ村に通水
青地樋・井手口樋Ⅱ平野川沿いの二十一カ村に

通水

東浦樋、榎木樋Ⅱ沼や太田に通水

現在、これらの樋は、築留土地改良区や青地井手口土地改良区などによって、管理されている。また、築留土地改良区の事務所建物前にある築留二番樋は、国登録有形文化財に指定されている。

大和川付替えのころ、全国の災害発生状況

大和川の付替えが行われたころは、全国で災害が頻発し、まさに災害の「当たり年」とも言うべき時期だった。

元禄9年 (1696)	諸国で飢饉。
元禄10年 (1697)	関東で地震。
元禄14年 (1701)	京都で洪水。
元禄16年 (1703)	関東で大地震（元禄大震災）。 相模と房総で大津波。
宝永元年 (1704)	浅間山噴火。諸国で洪水。
宝永4年 (1707)	富士山噴火。
宝永5年 (1708)	京都で洪水。

元禄17年 (1704) に年号が「宝永」と改元されたのも、前年に元禄大震災が起こったためである。また、災害ではないが、後に「忠臣蔵」として有名になる「赤穂事件」があったのもこのころ（元禄14～15年）のことである。

4 自己の生命をかえりみず田畑に水を

弓削村庄屋・西村市郎右衛門

大和川の付替え後、元の流れの一部は、農業用の用排水路などとして残された。しかし、すべての樋の設置が最初から認められていたわけではない。青地樋と井手口樋の誕生の影には、一つの物語が伝えられている。

付替えによって、元の川筋の慢性的な洪水被害はなくなったが、皮肉にも今度はこれらの地域で渇水問題が生じることとなった。

そして、付替えから十年後の正徳四年（一七一四）、河内一帯を襲った早魃^{かんぱつ}は特に激しく、中でも弓削村、田井中村など、平野川（了意川）流域の二十数カ村の事態はことのほか深刻だった。

この事態を解決するには、新しい大和川から水を引く管（樋）を新たに作る以外に方法は、ない。しかし、農民らの訴えにも関わらず、樋新設についての奉行所の許可は下りなかった。

このとき、自らの生命をかえりみず、独断で樋を作った人物がいた。弓削村（現在の八尾市）の

庄屋・西村市郎右衛門である。市郎右衛門は、青地と井手口の二カ所に樋を作り、これによって、平野川沿いの村々は、以後、早魃から救われることになった。しかし、果して市郎右衛門は捕らえられ、大坂城内で獄死したという。

大正五年（一九一六）、地元有志の手によって、現在のJR志紀駅南側に市郎右衛門の顕彰碑が建てられた。また、同地区に残る「講（功）念仏踊り」という踊りは、市郎右衛門の霊を慰めるためのものだと伝えられている。



西村市郎右衛門の碑

その後の大和川

1 新田開発

大和川付替え工事終了後、旧川筋、約千六十町歩（約千五十ヘクタール）が新田として開発された。他方、新川筋となった農地（潰れ地）は、約二百七十町歩（約二百六十七ヘクタール）だった。現在、地名として残る鴻池新田も当時開発された新田の一つ。これらの新田では、主として綿が栽培された。河内木綿である。

2 綿栽培と島畑

当時、綿作りは、「島畑」「掻き揚げ田」「半田」などと呼ばれる農地で行われていた。一区画の田の周囲の底土を掘り下げ、その土を中央に盛り上げて、できた畝に棉を植えるのである。そして、周囲の低くなった部分には稲を植えた。

これは、大和川の付替えによって水が不足気味となった田に、少しでも水を引くための工夫である。最盛期には、一万六千町歩（約一万五百ヘクタール）

良地となり、新たな洪水の危険が発生した。昭和五十七年（一九八二）の洪水でも、これらの地域を中心に被害が出たことは記憶に新しい。遊水地機能を果たしていた水田が少なくなってきただけに、依然、対策が必要とされているところである。

付替え後は、堺を中心に、現在までの約三百年間で十回余りの洪水が発生している。他に、上流・亀の瀬地区の地すべりの原因とする洪水もある。スーパー堤防、西除川バイパス水路、初瀬ダム等の建設、地すべり対策工事などが行われているところである。

また、大和川は、付替え後も大量の土砂を下流に運び続け、そのため河口は大きく海側に押し出されている。



初瀬ダム

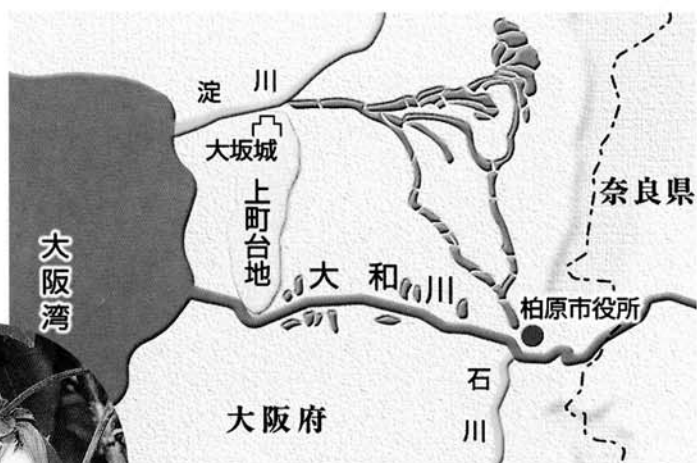
ル）以上もの面積で栽培されていた。しかし、明治以後、安価な外国産の綿に押され、現在では、河内地域で産業としての綿作りは行われていない。

3 工事完成直後の洪水

付替え工事完成から十二年後の享保元年（一七一六）六月、工事の起点となった「築留」の堤防が、幅約百四十メートルにわたって決壊した。川の中に長さ一キロメートル以上、幅約百メートルにも及ぶ巨大な粘土の台地が、いくつか残されたままになっていたためである。粘土の台地は、川の流れで自然に消滅すると思われていたのだ。翌、享保二年（一七二七）、これらの台地を取り除く工事が行われた。この終了をもって、大和川の付替えは完了したと言えるかも知れない。

4 新たな洪水の危険・治水対策の必要性

付替えによって旧川筋の慢性的な洪水被害は解消されたが、その一方で、新川筋の左岸一帯が排水不



川跡にできた新田（上）と綿（左）



現在の大和川

1 現在の築留

それまでの流れを、堤防を築いて留めたことによるのだろうか、付替え工事の起点となった地を通称「築留」という。柏原市上市二丁目、国道二十五号・安堂交差点付近で、現在、ここには、付替えの功労者・中甚兵衛の銅像をはじめ、治水関係の碑などが建ち並び、治水記念公園として整備されている。近くには、柏原市役所や市民文化会館「リビエールホール」、築留土地改良区の事務所などがある。リビエールホールではミュージカル「大和川物語」の公演なども行われ、治水記念公園と合わせ、小学生を中心に、毎年、多数の見学者が訪れている。

2 水質の悪化・環境保全の必要性

現在の大和川の水質は、全国の一級河川の中でワースト一位、二位という、不名誉な事態となっている。

大和川をきれいにするために、大和川清流ルネッ

サンスヤククリーン作戦など、市民と行政が一体となった活動が繰り広げられているところである。



治水記念公園

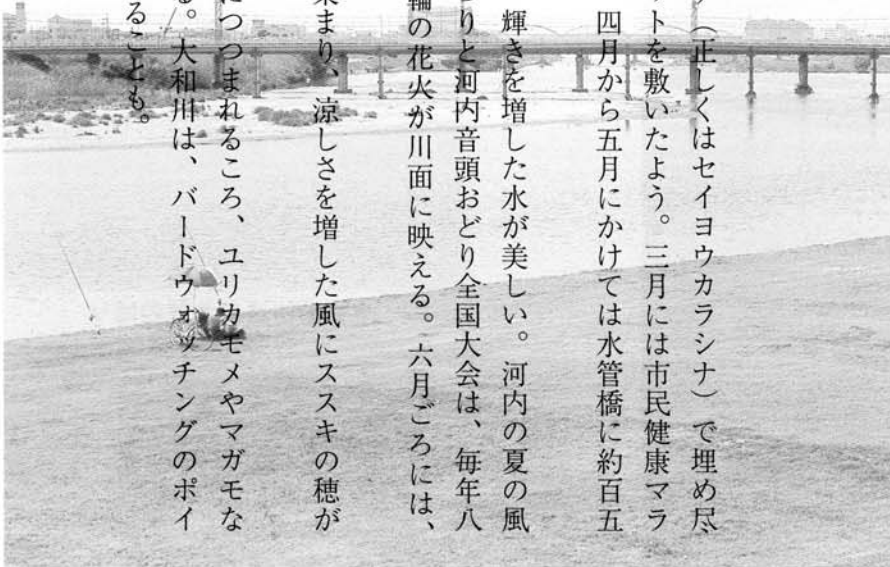
3 大和川の四季

春 河川敷はナノハナ（正しくはセイヨウカラシナ）で埋め尽くされ、黄色のカーペットを敷いたよう。三月には市民健康マラソン大会などが行われ、四月から五月にかけては水管橋に約百五十の鯉のぼりが泳ぐ。

夏 緑の山と青い空、輝きを増した水が美しい。河内の夏の風物詩・柏原市民郷土まつりと河内音頭おどり全国大会は、毎年八月、河川敷が会場。大輪の花火が川面に映える。六月ごろには、環境フェアも行われる。

秋 東の山は秋色に染まり、涼しさを増した風にススキの穂がゆれる。

冬 あたりが冬枯れにつつまれるころ、ユリカモメやマガモなどの渡り鳥がやって来る。大和川は、バードウォッチングのポイント。ときどき雪が積もることも。





秋の夕日に染まる大和川



秋の風にゆれるススキ



大和川の雪景色



大和川納涼花火大会



河川敷に咲くナノハナ



水管橋に連なる鯉のぼり



河内の夏の風物詩・河内音頭おどり全国大会

その後の甚兵衛

中甚兵衛

工事完成の翌、宝永二年（一七〇五）、剃髪して「乗久」と名乗る。享保十五年（一七三〇）、九十二歳の天寿をまっとうする。

大久保甚兵衛

工事完成後、江戸に戻り、伏見主水とともに金・時服を賜る。同年、大坂町奉行に就任。さらに、従五位下に除せられ、大隅守に任じられる。



中甚兵衛の肖像画
(中甚兵衛十代目・中好幸氏所蔵)



中甚兵衛が愛用としたと伝えられる陣羽織
(中好幸氏所蔵)

付替え工事関係大名家の系譜

稲垣家（譜代）

宝永元年（一七〇四）、稲垣重富（従五位下・対馬守、和泉守、下野・烏山二万五千石）、若年寄として、大和川付替え（川違え）の沙汰役を務める。河内に五千石加封、計三万石となる。

その後、昭賢のとき、享保十年（一七二五）に志摩・鳥羽へ移封（三万石）。明治に至る。

稲垣重富の曾祖父・重綱（従五位下、摂津守）は、大坂城代だった慶安元年（一六四八）に、現在の柏原市国分東条、芝山南側の低湿地を開拓、柏原市内現存最古の下水道管ともいえる「田輪樋」を建設するなどしている。芝山は、大和川が河内平野に入ったところに立ちふさがるように存在する山。このため、大和川はここで大きく湾曲し、当時、湾曲部分の山裾（山）は低湿地となっていた。かつては、「鳥山」と呼ばれていたほど。

二代にわたって大和川の治水に関わった稲垣家は、当時、けっこう柏原とは縁が深かったようである。

本多家（譜代）

宝永元年（一七〇四）、本多忠国（従四位下・中務大輔、播磨・姫路十五万石）、大和川付替えの助役となるが、工事開始直後の三月に病死。このとき、嫡子の忠孝は、七歳。

同年、忠孝、越後・村上へ移封（十五万石）。

宝永六年（一七〇九）、忠孝死亡により、無嗣除封（つまり、とりつぶし）。

同年、一族の忠良が名跡取立（つまり、お家再興）（五万石）。

その後、五万石のまま、三河・刈谷（一七一〇）、下総・古河（一七一二）、石見・浜田（一七五九）、三河・岡崎（一七六九）と、移封され、明治に至る。本多家は、徳川家康の家臣で譜代の功臣といわれる「徳川四天王」の一人、本多忠勝の子孫。ちなみに徳川四天王とは、本多忠勝（中務大輔）、酒井忠次（左衛門督）、榊原康政（式部大輔）、井伊直政（兵部少輔）の四人をいう。

また、忠国は、徳川家康の曾孫でもある。家康の十一男で水戸徳川家の初代である頼房の孫にあた

柏原舟と大和川の付替え

寛永十年（一六三三）の洪水で大きな被害を受けた柏原村では、当時の代官・末吉孫左衛門が、付替え前の大和川を利用して、柏原から大阪まで貨物を運ぶ舟を運行させ、その収益を災害復旧にあてようと考えた。

孫左衛門は村役人らと準備を進め、寛永十三年（一六三六）の秋から「柏原舟」の運行が始まった。全長約十二メートル、幅約二メートル、深さ約〇・四メートルの舟は、二人の乗員によって運行された。当初、四十艘で始まった柏原舟は、予想以上に順調であったため、四年後の寛永十七年（一六四〇）には三十艘増え、合計七十艘になった。

柏原村は、当初、大和川の付替えに反対であったが、大和川の付替え後も平野川（了意川）を利用して柏原舟の運行は続き、柏原村の経済の発展に大きな役割を果たした。

しかし、柏原舟は明治時代以降の鉄道の開通などによって役割を終え、しだいに姿を消していった。

ところで、その鉄道開設にあたっては、柏原を起

点とするまぼろしの鉄道計画があった。実際には計画の途中で水泡に帰ってしまったものの、これが完成していれば、大阪の経済・文化構造は大きく変わっていたかも知れない。

それは、明治二十八年（一八九五）、河内地方の四十名程の有志が計画した浪速鉄道（片町線）の住道駅から大阪鉄道（関西本線）に至る八・五マイルの「河内鉄道」計画である。当初は八尾までの計画であったが、柏原で河陽鉄道（近鉄南大阪線）と接続させるため、後ほど延長された。

起業目論見書によると、資本金三十万円で株式を募り、乗客は沿線の有名な神社仏閣への参詣を見込んでいた。また、河内木綿や、沿線に数多くある山水を利用した工場での生産物などを運ぶとしており、線路は旧大和川筋の玉串川の堤防に敷設するとしている。

この中で注目すべき点は、利用予想見込みで柏原からの貨物利用予想が他の駅（恩智、山本、八尾、瓢箪山、生駒、住道）より、ずばぬけて多いと予想

されていることである。当時も柏原は、物資の集散地としての役割を果たしていたことが推測される。

明治三十年（一八九七）七月には、計画に実現性が高いと通信大臣から仮免許が与えられ、翌年創業総会を開催し役員人事等を決めるなど、計画は着々と進むかに見えたが、当時、経済不況が深刻となつてきており、「河内鉄道」計画もその影響をもろに受け、結局完成しないままに終わった。



大和川にかかる鉄橋を走る電車



復元された柏原舟

昭和62年（1987）まで、市民文化センター（柏原市上市4）敷地内に展示されていた。

大和川治水・殿中殺人事件

若年寄が大老を殿中で刺殺、

犯人の若年寄も直後に老中らに斬殺される

原因は大和川の治水工事をめぐるトラブルか

天和三年（一六八三）、河村瑞賢が付替え反対の意見を主張したのに対し、若年寄・稲葉正休は、中甚兵衛の意見を入れて大和川の付替えを主張した。両者の主張は平行線をたどったが、結局、大老・堀田正俊が瑞賢の主張を採用したところから、幕府の方針は「付替え廃止」と決定されるに至った。このとき、瑞賢の意見により実施された淀川河口の治水工事で新しく開削されたのが、安治川である。

その後も稲葉正休と堀田正俊の意見は、対立。正休の意見が、ことごとく正俊によって否定されることから、正休の正俊に対する怨恨は深まっていた。

そして、ついに、正休が、殿中で正俊を刺殺するという事件に発展したのである。貞享元年（一六八

八）さく思っていた人物、正俊に頭が上がりなかつた人物。

そう、將軍・徳川綱吉である。

堀田正俊は、春日局かすがのつばね（徳川家光の乳母）の養子。

家光とは兄弟同然の間柄であり、いうなれば、徳川綱吉（家光の四男）の義理の叔父にも準じる人物。

そして、將軍・綱吉の擁立に尽力した。もし、正俊がいなければ、將軍・綱吉の誕生はなかつた（綱吉は將軍になれなかつた）といわれているほどである。こうしたところから、正俊は、綱吉政権下で大老に就任したものである。剛直な性格であったとも伝えられ、とすれば、綱吉にとつては、まさに「目の上のこぶ」という存在であったのかも知れない。

しかし、事件の真相は、三百有余年の時を経て、すでに闇の中である。

ただ、江戸時代の初め、本多正信らとの政争に敗れて中央から退けられていた大久保家が、忠朝のときに再び老中となり中央政界に返り咲いたというのは、歴史上の事実である。事件から二年後の貞享三年（一六八六）、忠朝は、下総・佐倉九万三千石か

四）八月二十八日のことであつた。大和川の治水に端を発する大老と若年寄の対立。これが、事件の唯一の原因だといわれている。表向きには。

大老・堀田正俊を刺殺した若年寄・稲葉正休は、その直後、老中・大久保忠朝らによって、めつた斬りにされて殺害された。このとき、正休は、無抵抗であつたという。通常であれば、逮捕して取り調べるのがすじ。事実、このときも徳川光圀（水戸黄門）が、忠朝の行為を批判している。しかも、正休は、正俊を刺殺した直後、忠朝に微笑ほほえみかけたという目撃証言も伝えられている。

これは、どういうことか。

正休と忠朝は、示し合わせて、正俊の殺害に及んだ。そして、忠朝が、そのことを隠すため、正休の口を封じた。と、考えられるのである。

では、なんのために口を封じたのか。

もちろん、事件の背後にいる黒幕のために、である。

その黒幕とは、誰か。

考えられる人物は、ただ一人。正俊の存在をうる

ら、父祖の地である相模・小田原へ十一万三千石で入封を果たしている。そして、かつて九州地方などを転々としていた大久保家は、その後、国替えを経験することもなく、小田原の地で明治を迎えている。

ところで、堀田正俊（大老、備中守、筑前守。下総・古河ほかに計十三万石）と稲葉正休（若年寄、石見守、美濃ほかに計一万二千石）は、親戚の間柄だったという。

この事件は、淀川改修の工事をめぐる対立が直接のきっかけだったとする見方もある。

また、事件後、老中の執務室（御用部屋）が、將軍の執務室から遠ざけられることになった。つまり、この事件は、後の側用人の権勢拡大のきっかけとなった事件でもあつたのである。

大和川付替え関係

これまでの記念事業など

付替え二百周年記念事業

明治三十七年（一九〇四）、付替え二百周年にあたり、中甚兵衛の記念碑建立が計画され、有志による募金活動が開始されるが、日露戦争の勃発により中止。

贈従五位祝賀

大正三年（一九一四）、大正天皇から中甚兵衛に對し、従五位の官位が贈られる。十二月八日に大阪府庁で伝達、二十日に東六郷村尋常小学校で奉告祭。

記念碑建立

日露戦争で中止となった、中甚兵衛の記念碑の建立。贈従五位を契機に復活。

大正四年（一九一五）に改めて計画され、募金活動が行われる。十二月十三日、今米村（現在の東大阪今米）の旧春日神社跡地で除幕式。昼夜花火を

により増刷され、築留土地改良区から発行される。巻末に、昭和三十年（一九五五）に施工された用水路（長瀬川など）改修工事の写真や記念碑、取水樋の現況写真等を追加掲載。

中甚兵衛の銅像建立

平成元年（一九八九）、中甚兵衛生誕三百五十周年にあたり、柏原ライオンズクラブが、同クラブ創立二十五周年記念として、中甚兵衛の銅像を建立。一月二十五日、柏原市教育センター前で除幕式。

平成二年（一九九〇）五月、築留の治水記念公園の整備完了に合わせ、同公園内に移設。

打ち上げ、踊りや芝居の興行なども行われたという。

付替え二百五十年記念事業

このときは、「二百五十年」ではなく、「二百五十年」目の記念として、行われたようである。

①昭和二十八年（一九五三）十月十三日 中河内郡柏原町市村（現在の柏原市上市）の築留土地改良区事務所で、記念式と中甚兵衛の慰霊祭。主催は、八尾市。築留土地改良区、事務所近くの築留の堤防上に「顕彰碑」の建立計画を発表。予算は、百万円。青地井手口土地改良区との共同事業。

②昭和三十年（一九五五）三月二十五日、「大和川付替二百五十年記念碑」除幕式。碑文寄稿は、赤間文三大阪府知事（当時）。「大和川付替二百五十年記念顕彰事業委員会」、記念誌「治水の誇里」と「大和川付替工事史」を刊行。

「治水の誇里」の増刷

昭和五十七年（一九八二）五月三十一日、大和川付替え二百五十年記念誌、「治水の誇里」が、コピー

ソーリャエンヤ大和川

（大和川付替え三百周年記念の唄）

作詞 大和川清州
（山西敏一）

- 1 奈良の都の昔から 洪水続く大和川
三百年のその昔 河内男の心意気
幕府へ訴え五十年 悲願のつけ替え遂に成る
ソーリャエンヤで語りつぐ 語りつぐ
- 2 川は流れて時移り 世は平成になったけど
中甚兵衛の銅像が 今も見守る大和川
人と川との町づくり 自然の環境守ろうよ
ソーリャエンヤで守ろうよ 守ろうよ
- 3 大和の水をとり集め エンヤコーリャの河内から
ソーリャだんじり泉州へ 流れる水は永久とこしえに
皆んなで築く新時代 鮎あゆの住みつく清流に
ソーリャエンヤで良くしよう 良くしよう

広報ビデオ

「わたしたちの大和川物語」・「大和川の流れ～北から西へ～」

広報冊子

「大和川物語」



ビデオ・・・VHS 収録約30分 1巻1,800円、冊子・・・30ページ 1冊300円

柏原市役所自治推進課と柏原市立歴史資料館で販売中

くわしくは、柏原市役所自治推進課広報広聴係（☎0729-72-1501、内線2443・2444）まで

参考文献

- 「大和川付替工事史」（畑中友次 一九五五・三）
「柏原市史」（第三巻・四巻）（柏原市 一九七二・三、一九七五・三）
「かしわらの史跡」（上・下）（重田堅一、柏原市 一九九二・三、一九九三・三）
「大和川物語（改訂第三版）」（柏原市 二〇〇三・九）
「河内の街道物語（第三版）」（柏原市 一九九二・四）
「大和川の付替 改流ノート」（中 好幸 一九九二・十二）
「甚兵衛と大和川 北から西への改流・三〇〇年」（中 九兵衛 二〇〇四・一）
「角川日本史辞典」（角川書店 一九八九・十二）
「日本全史ジャパン・クロニック」（講談社 一九九一・三）
監修 山西敏一（柏原市長）
アドバイザー
中 九兵衛（好幸）（中甚兵衛十代目）
ご協力ありがとうございました
（有）シリウス・プロダクツ

文Ⅱ宮本知幸／構成Ⅱ菅村恭子／写真Ⅱ宮本知幸、脇田直行、松本利次、菅村恭子

資料館など

柏原市立歴史資料館

柏原市高井田1598-1（☎0729-76-3430）

開館＝午前9時30分～午後4時（入館は午後3時30分まで）。

休館＝月・火曜日、祝日（火曜日が祝日の場合は翌日も）、年末年始（12月27日～1月5日）。入館無料。

大阪府立狭山池博物館

大阪狭山市池尻中2丁目（☎072-367-8891）

開館＝午前10時～午後5時まで（入館は午後4時30分まで）。

休館＝月曜日（月曜日が祝休日の場合は翌日）、年末年始（12月28日～1月4日）。入館無料。

大阪歴史博物館

大阪市中央区大手前4-1-32（☎06-6946-5728）

開館＝午前9時30分～午後5時〔ただし金曜日は午前9時30分～午後8時〕
（※入館は、閉館の30分前まで）。

休館＝火曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始（12月28日～1月4日）。

料金＝大人600円、高大生400円、中学生以下無料。

八尾市立歴史民俗資料館

八尾市千塚3-180-1（☎0729-41-3601）

開館＝午前9時～午後5時（但し、入館は午後4時30分まで）。

休館＝火曜日（火曜日が祝日の場合はその翌日）、祝日の翌日（ただし祝日の翌日が土、日、休日の場合を除く）、年末年始（12月29日～1月5日）、その他（展示替等により臨時休館する場合があります）。

料金＝大人200円、高大生100円（特別展の場合は別料金）。中学生以下・65歳以上の方・障害者手帳等を持つ方（介添人1人を含む）は無料。

東大阪市立郷土博物館

東大阪市上四条町18-12（☎0729-84-6341）

開館＝午前9時30分～午後4時30分。

休館＝月曜日（祝日のときは翌日）、祝日の翌日（土・日曜日は開館）、年末年始（12月29日～1月6日）、展示準備期間。

料金＝大人50円、高大生30円、小中生20円（特別展は別料金）。